悪霊　第三部・五月の紅い空

【登場人物】

伊集院満枝……H市の地主の娘
猪俣佐和子……満枝の元クラスメイト。東京で左翼活動に従事
安西小百合……伊集院満枝の一年後輩
佳代……貧しい農家の娘
喜代美……女工
小沼健吾……労働運動家。伊集院家の元小作人
篠原ヨシ……伊集院家の使用人
村野栄太郎……党員。マルクス主義研究者
堀田弁護士……満枝の法定後見人
川奈昭一郎……満枝の元婚約者・昭三の父。川奈産業社長
白瀬朱鷺……女相場師。料亭「扇屋」の女将
鎌田悟……党員。東京支部第四地区長
増田喬……小百合の兄の後輩

昭和五年（一九三〇）年三月～五月。東京市、北海道H市

Ⅶ

新橋から銀座、京橋を経て日本橋へと伸びていく、二年前に完成したばかりの昭和通りぞいに、新築のホテルが建っている。御影石の階段をあがると、玄関を入ってすぐ、その日に開かれる宴会の一覧が黒塗りの木札に白く墨書され、麗々しく並んでいた。

「朱雀の間　代々木産業ご一行様」

相変わらず、つまらぬ浪費を……。一張羅の背広を着た小沼健吾は、舌打ちをしながら、二階へとあがった。二百平方メートルの宴会場に入ると、白いクロスをかぶせた洋式の円テーブルが二十ほど並べなれ、それぞれを六つの椅子が囲んでいる。そして、壁際に二十人の女たちが、きまり悪そうに固まっていた。

貴代美と、彼女がオルグした女工たちである。

精一杯お洒落はしているものの、貴代美を除き、場慣れしていないのは明らかだった。

……当たり前だ。

小沼は思った。

……だいたい、ホテルの宴会場なんて、さかんに給仕が出入りするし、人目につきやすい。怪しまれて警察に通報されたらおしまいだ。

「君たちだけか？」

小沼が問うと、貴代美はうなずいた。腕時計を見ると、すでに十二時半。

午前十時から芝公園で、式典が開かれる。五十団体、一万数千人の労働者が集っているはずだ。十二時過ぎまでは演説会が行われ、その後、デモ行進が行われる。芝公園から築地を経て新橋へ。その後は昭和通りを御徒町を経て上野公園まで続いて、午後三時ごろに解散となる手はずだった。

もうデモ行進は芝公園を出発しているだろう。そろそろ、このホテルが面している昭和通りに着くころだ。

他の連中はどうしたんだ……。間に合わないぞ。

小沼は歯噛みしたが、心配そうにこちらを見ている女工たちの眼差しに気づき、笑顔を作った。

「とにかく、座りなさい」

「うン」

貴代美はうなずき、女工たちを促して席に着かせた。給仕が寄ってきて、お食事をお出ししますか？　と問う。女工たちが座る一角をのぞいてがらんとした宴会場を見渡し、そうしてくれ、と言った。

やがてスープが運ばれてきた。コースの西洋料理らしく、皿の左右にナイフやフォークが揃えられている。戸惑う女工たちを見やって、貴代美はスープ皿を手で持ち上げ、そのまま口につけて飲み干した。

「あちっ！」

貴代美はどんと皿をテーブルに置き、慌ててコップの水を飲み干す。女工たちはどっと笑い、それからにぎやかにおしゃべりしながら、スープに息をかけて冷ましたり、皿に口をつけて呑んだりし始めた。

小沼は、心の中で貴代美に感謝した。彼女の機転で、女工たちを落ち着かせることができた。後は、幾人同志が集まってくるか……。

党中央が指令した「行動」とは、武装蜂起だった。

デモ行進が行われるコースの数ヶ所に武装した「行動隊員」を潜ませ、時機を見て乱入し、蜂起を呼びかける。反対する者はその場で殺害してもいい。デモ隊の賛同を得られれば、彼らを引き連れて、宮城や帝国議会に突入し、革命政権を樹立するというのである。

成功の望みが薄いことは、小沼は当初から感じていたことだった。今、デモを行っている労働団体を、「党」は、堕落した御用組合だと罵ってきた。彼らになんの根回しもせず、不意打ち的に蜂起を呼びかけたところで、ついてくるとは到底思えない。

それに……。

小沼は、窓から昭和通りを見下ろした。サーベルを吊った警官が、蟻の這い出る隙間もないほど、通りを挟んで整列している。デモ行進そのものは合法だが、スローガンに法に触れる表現があったり、ちょっとでも不穏当な動きを見せればすかさず検挙しようと待ち構えているのだ。

そんなところに百人で突入しても、たちまち取り押さえられてしまう可能性が高い。ましてや、本当に百人集まるかどうか……。現に、今来ているのは貴代美ら二十人の女工たちだけなのだ。

さらなる懸念は、武器だった。銃、ナイフ、竹槍、ハンマー、さらにはダイナマイトやガソリンがすでに運び込まれている手はずだったが、どこにも見当たらない。支給された拳銃は隠し持っていたが、まさか一丁の拳銃で暴動を惹き起こせるはずなどないではないか。

宴会室のドアが開いた。三人の「組合員」が入ってきて、小沼の座っていたテーブルに着いた。

「だめだ」
座るなり、一人が沈痛な面持ちで言った。
「君たちだけか？」
そう問うと、三人はうなずいた。彼らが集めた仲間たちは、急な場所の変更に戸惑い、結局参加を取りやめたという。小沼の懸念は的中した。武装蜂起に参加するのは、小沼ら四人と、貴代美が集めた二十人の女工たち、たった二十四人だけなのだ。
「どうする……？」
一人が硬い面差しで訊ねた。
これだけの人数で、武装蜂起などできるはずがない。だが、誰も中止しようとは言わなかった。
「党中央」の指令は絶対である。現場の判断で中止を決めれば、臆病者とそしられ、命令違反で懲罰を受けることになるだろう。
「こうしよう……」
小沼は決断を下した。離れた席についていた貴代美を呼び寄せ、同じテーブルに座らせた。給仕が全員部屋にいないことを確かめ、声をひそめた。
「拳銃を持っているのは何人だ？」
一人が手を上げた。小沼はうなずき、拳銃を携行していない二人に言った。
「では、君たちは、ガソリンやダイナマイトが運ばれてきたら、それを持って歌舞伎座あたりに行き、ダイナマイトを爆発させ、火事を起こしてくれ。デモ隊にも見えるよう、派手に頼むぞ」
それから拳銃を持っている男に顔を向けた。

「同じ時刻に、ぼくと君はデモ隊に接近し、空に向けて発砲する」
続いて、強張った面持ちの貴代美を見やった。
「デモ隊の注意がこちらを向いたら、君たち女工は、武装蜂起が始まった、革命軍が宮城に突入していると大声で叫んでくれ。デモ隊が混乱したら、全員、とにかく宮城に向かって走るんだ」
「ちょっと待ってくれ」
一人の男が訊ねた。
「デモ隊に、合流を呼びかけるんじゃないのか？」
「これだけの人数で、そんなことをしても、誰もついてきやしない。警官に取り押さえられて終わりだ」
まず、混乱状況を作るんだ。恐慌状態になれば、群集心理が働く。わけもわからず、われわれについてくる者も現れるだろう。その可能性に賭けるしかない。
「わかった」
貴代美は立ち上がった。
「あたい、みんなに説明してくる」
席を立った貴代美の背を見送りながら、一人が言った。
「しかし、ダイナマイトやガソリン、武器はどうしたんだ」
窓の外で、歌声が響いてきた。

聞け万国の労働者

轟き渡るメーデーの
示威者に起こる足取りと
未来を告ぐる鬨の声

小沼らは立ち上がり、窓に駆け寄った。デモ行進が近づいてくる。広い昭和通りをびっしりと埋め尽くし、大声で労働歌を歌いながら。

汝の部署を抛棄せよ
汝の価値に目醒むべし
全一日の休業は
社会の虚偽をうつものぞ

「どうするんだ？」
一人が泣き出しそうな顔で小沼に詰め寄った。
「武器もないまま突っ込むのか？　通り過ぎてしまったらお仕舞いだぞ！」
「落ち着け！」
小沼は小声で叱責した。
「武器になりそうなものを探せ。燭台でも、包丁でもかまわん。万一、武器が間に合わなかった事態に備えるんだ」

ドアが開いた。一同の眼がそこに注がれた。
猪俣佐和子が立っていた。

おおわちゃん……。
貴代美は眼を見開き、その名を口にしようとして、押し黙った。
たとえ同志の間であっても、本名を声にするのは慎まねばならない。まして、貴代美は佐和子が入党したことを知らない。なぜ、佐和子がこの場にいるのか、見当もつかなかった。
佐和子の眼も見開かれていた。眼差しは貴代美に注がれ、一瞬揺れた。だが、佐和子はすぐに視線を逸らし、小沼に歩み寄った。
「レポ（連絡）に来ました」
小沼は小さくうなずいた。佐和子は続けた。
「武器の用意が整ったそうです」
小沼らは一瞬顔を輝かせたが、すぐに不審げな面差しに変わった。
佐和子は、手ぶらだったからだ。
「……その武器はどこに？」
「官憲の眼が厳しく、分けて隠してあります。すぐに取りにいってください」
小沼らは顔を見合わせた。
デモ隊はすでに、ホテルの真下を行進しているのだ。

永き搾取に悩みたる
無産の民よ決起せよ
今や二十四時間の
階級戦は来りたり

「で……」
小沼は肩で息をしながら訊ねた。
「どこにあるんです」
「ガソリンは代々木に、竹槍は馬橋のアジトにあります」
「冗談じゃない！」
小沼は怒鳴った。
「今から代々木や馬橋に取りにいったとして、ここに戻ってくるまでにどれくらいかかると思っているんですか？」
佐和子は顔を引きつらせた。小沼は続けた。
「運よく車を手に入れられたとしても、一時間はかかります。その間に、デモ隊は通り過ぎてしまう！」
小沼は続けた。
「実行不可能です。行動隊長として、そんな指令は受け取るわけにはいきません！」
佐和子は青ざめて唇を震わせていたが、やがて眼をすえて、小沼をにらみつけた。

「あなたは……党の指令を無視するのですか？」
「できないことは、できないと言ってるんです」
小沼は静かに答えた。佐和子は拳を握り締め、なおも言った。
「では、あなたが指令を無視したことを、党中央に報告します」
「ああ、どうぞ。これから、ここにいる行動隊員で協議します。その結果、突入と決まれば、すぐにこの場で突入します。中止と決まれば、すぐに解散します」
小沼は踵を返して、中央のテーブル近くに立ち、全員を呼び集めた。二十三人が小沼を囲んで円を作り、その外側に佐和子はぽつんと取り残された。小沼は静かに言った。
「みんな、聞いただろう。ガソリンもダイナマイトも武器はここには来ない。もし行動を起こすとなると、徒手空拳であのデモ隊と警官隊の中に飛び込むことになるだろう。まず成功の見込みはない。それでもなお、行動を起こすべきだと思っている者がいたら、手を挙げてくれ」
二十三人が互いに目を合わせた。誰独り、手を挙げようとはしない。とはいえ、積極的に行動中止の意志を現す者もいなかった。

起て労働者奮い起て
奪い去られし生産を
正義の手もて取り返せ
奴らの力なにものぞ

今や昭和通りを真っ黒に埋め尽くしたデモ隊の歌声が、重く雲のたちこめた空を突き破るばかりに響いていた。広い宴会室の中央に集まった二十三人は彫像のように動かない。
「あなたたちは、それでもいいの？」
輪の外にいた佐和子が口を開いた。
「貧しいまま、地主や資本家に搾取され、階級の奴隷として生涯を送る……それを覆す機会が訪れたというのに、何もせずに撤退するというの？」
「あんたは黙っていてくれ」
小沼が遮った。
「黙らないわ！」
佐和子は叫び、貴代美に駆け寄った。戸惑う貴代美の胸ぐらを掴むばかりに詰め寄った。
「お願い……わたくしも一緒に行動するわ。たとえ武器がなくとも、素手でも、立派にたたかってみせる……見て……外にはあれだけの同志がいるのよ。今は対立していても、同じ労働者階級、苦しみを共にする同志たちよ。心を込めて訴えれば、必ずわたくしたちについてきてくれるはずよ……だから、諦めないで」
じっと貴代美を見つめる佐和子の眼が、しだいに潤みを帯び、涙が雫となってこぼれ落ちた。
「わたくし、検挙なんて怖くないわ。どんなひどい拷問にあっても耐えてみせる……いずれまた、あなた方と一緒にたたかう日のために、見事に生き抜いて見せるわ。もし殺されたとしてもかまわない。あなた方が解放され、輝かしい未来を迎えるための捨て石となれるなら……」
「おさわちゃん……」

貴代美が静かに、佐和子の耳にだけ響くように言った。佐和子は口を噤んだ。
そう呼ばれるのを待っていたように。
貴代美は眼差しを伏せた。しばらく俯き加減に唇を噛みしめていたが、やがて顔をあげ、小さく呟いた。
「ごめん……」
呆然と眼を見開く佐和子に背を向け、貴代美は大声で言った。
「あたいは、小沼さんに従う。このまま解散すべきだと思う」
「何を言ってるの！」
悲鳴のような佐和子の叫びに眼もくれず、貴代美は続けた。
「機会は今日だけじゃない。あたいたちのたたかいは、これからも続くんだ。成功の見込みもないのに闇雲に突っ込んでいくより、ここは引き揚げて、次の機会を待つべきだと思う……」
貴代美の眼にうっすらと涙が浮かんだ。
「あたいだって悔しい……ここまで来て、何もせずに帰るのは、死ぬほど悔しい……でも、あたいを信じてついてきてくれたみんなが、無駄に警察に捕まっちゃうのは、もっと嫌なんだ」
佐和子は、女工たちを見廻しながら続けた。涙がこぼれ落ち、頬をつたった。
「みんな、勘弁して……。ここは悔しいけど、小沼さんの言うとおり、静かに引き揚げようよ」
女工たちのすすり泣きが響いた。男の組合員たちも項垂れている。
小沼が口を開いた。
「では、いったん解散ということで決まりだな」

それから、矢継ぎ早に指示を出した。二人一組となって静かにホテルを出ること。それぞれ別々の帰り道を取ること。明日の街頭連絡の場所や時間……。

女工たちは、小沼の指示どおり、二人一組となって次々に宴会室を出た。みな、貴代美と抱擁をかわしてドアに向かっていった。貴代美の胸で泣き崩れる女工もいた。

女工たちがすべて出ていったのを確かめて、貴代美は佐和子の前に立った。

佐和子は、拳を握りしめ、硬い面差しで唇を噛みしめていた。顔に血の気がなく、大理石のように白かった。

「おさわちゃん、あたい……」

小さく呼びかけられ、佐和子は貴代美を見やった。佐和子の眼は、瞳が動いていなかった。その冷たい眼差しに貴代美は言葉を失った。軽く頭を下げて、外へと消えた。

ドアが音をたてて閉まった時、佐和子の膝が崩れた。床に座り込み、そのまま動かなかった。

我らが歩武の先頭に
掲げられたる赤旗を
守れメーデー労働者
守れメーデー労働者

小沼は窓から外を見やった。

デモ隊の最後尾が見えてきた。その後ろを自転車に乗った警官が追っている。

「井上さん」

座り込んだ佐和子に声をかけた。佐和子は身じろぎもしなかった。

「ここの支払いは、すんでるのでしょうね？」

佐和子は答えなかった。小沼は軽く舌打ちして組合員たちを見やり、金は持っているか？　と訊ねた。四人の持ち金をかき集め、小沼は続けた。

「ホテル側には、集まりが悪いので宴会は中止にすると説明します。代金は、我々が立て替えておきますので、後でちゃんと支給してくださいよ」

小沼たちが宴会室から去り、独り取り残された佐和子は、よろよろと立ち上がった。立ち上がりざまに椅子につまづいてよろけ、テーブルにつかまった。

強張っていた面差しが緩み、涙がとめどなく溢れだしていた。嗚咽が漏れた。佐和子はテーブルを離れ、ドアに向かって歩き、またもよろけ、壁際の窓に肩を打ち付け、床にくずおれた。顔をあげ、がらんとなった広い宴会室に独り、当たり憚(はば)らず号泣した。

貴代美ちゃん……。

紅く泣き腫らした眼に、五月とは思えぬ重苦しく曇った空が映っていた。

メーデーでの武装蜂起は不発に終わった。

新橋のホテルから淡路町の隠れ家に戻った小沼は、佳代を連れて姿を消した。

その一ヶ月後、シベリアからモスクワへ向かう汽車に揺られる数人組の日本人乗客のなかに、貴代美の姿があった。

猪俣佐和子は、武装蜂起の失敗の責任を問われて格下げとなり、鵠沼に引きこもって、村野の助手に専念した。

その年の秋から冬にかけ、各地に潜伏していた「党中央」の幹部たちはことごとく逮捕され、「党」は壊滅状態となった。

同じ頃、北海道H市では、増田喬と安西小百合の結婚式が、しめやかに行われていた。

（第三部・了）